

## 五重の福音書を持つ記録者 (Part 1 of 2)

マタイは徴税人であり、またレビという名を名乗っていた。レビという名前だけで、彼がレビ人であったとは限らないが、そのような方向性はあるようだ。レビ族は、什分の一献金を受け取る役割を担っていたため、徴税人と重なる管理能力や計算能力があった（Ⅱ歴代誌24:6）。ローマ帝国は、徴税人の何人かをこの資格のある人々から採用したのかもしれない。

さらにマタイは、他の福音書記者の誰よりも旧約聖書を引用し、聖書に関する豊富な知識を示している。彼は聖霊の助けによって、またイエスと一緒に過ごすことによって、この知識を得たに違いないが、彼がレビ人としてすでに聖書の堅固な基礎を持っていて、イエスの教えを土台にして「神の道をより正確に説明した」（使徒18:26）可能性も十分にある。マタイの旧約聖書への言及について、「クレイグ・L・ブロンバーグは『新約聖書の旧約聖書使用に関する注解』の中でこう書いている：

\*マタイの福音書には、ヘブライ語の聖書が[...]たくさん出てくる。他の3つの福音書を合わせると約65の引用があるのに対し、約55の引用は、注解者が一般的に「引用」と呼ぶのに十分な表現である。[...]明示的な引用に加え、聖書の引用や反響がこの福音書のどの部分にも数多く見られ、その頻度はマルコ、ルカ、ヨハネのおよそ2倍である。

<https://christianity.stackexchange.com/questions/46209/in-which-one-of-the-four-gospels-is-the-old-testament-quoted-the-most>

マタイは、イエスが言われた「すべての学者ようだ」：「天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しいもの（新約）と古い（旧約）ものを取り出す、一家の主人のようです。」（マタイ13:52）。マタイは確かに、旧約聖書から豊かな宝を取り出し、旧約聖書の一部から自分の書物を構成している。その一方で、新約聖書の宝の中心にイエスを据えている。

### 歴代誌以後のパターン

ヘブライ語聖書では歴代誌第一と歴代誌第二が合体して一冊の書物となっており、9章からなる系図で始まり、委託で終わる。歴代誌と同様に、マタイの福音書も系図で始まる唯一の福音書であり（ただし、アダムではなく、イスラエル民族の建国者であるアブラハムから始まる）、マタイ福音書の最後は、ヘブライ語の旧約聖書の書順の最後の節と平行する委託で終わっている（ユダヤ教の旧約聖書の書「タナク」は、キリスト教の旧約聖書と同じ内容だが、配列が異なり、歴代誌第二で終わっている）。

歴代誌では（この記事では主に歴代誌の2冊を1冊と呼ぶことにする）、9章からなる系図の中でレビとユダの系図に重点が置かれている（ユダに4章半、レビに4章半が割かれ、残りの8章半はイスラエルの他の10部族とイスラエル

に至る子孫に割かれている-かなり不釣り合いだが、歴代誌のテーマに沿っている)。

油注がれた王であるキュロスの使命と、イスラエルの完全で油注がれた祭司王であるイエスの使命とを比較してみよう：

	マタイの福音書28:18~20	II歴代誌 36:23
与えられた権威	わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。	ペルシアの王キュロスは言う。 「天の神、主は、地のすべての王国を私にお与えくださった。」
エルサレムに神殿を建てる VS すべての国に教会を建てる	あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。	そして、この方が、ユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てるよう私を任命された。
神の臨在	見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。	あなたがた、だれでも主の民に属する者には、その神、主がともにいてくださるよう。その者は上って行くようにせよ。

歴代誌は祭司職、神殿そして、神殿を建てたユダの王統に焦点を当てている。マタイによる福音書では、祭司、神殿、サドカイ人、パリサイ人、礼拝、律法を守る、律法学者という言葉が他のどの福音書よりも多く使われ、王としてのイエスに焦点が当てられている。歴代誌は様々な方法で主題別に分けることができる。

私は神殿に関連して5つのセクションに分けた。

1. 特にレビとユダに焦点を当てた系図 (I歴代誌1~9章)
2. ダビデによる神殿建設の準備 (I歴代誌10~29章)
3. ソロモンによる神殿建設 (II歴代誌1~9章)
4. 神殿が象徴するものに対する反抗と再建 (II歴代誌10~35章)
5. 神殿の破壊と再建の命令 (II歴代誌36章)

上記のセクションを年数で見ると、おおよそこのような年数になる：

1. アダムからダビデまでの2883年

2. ダビデの治世40年
3. ソロモンの治世40年
4. リバイバルと反乱の322年
5. エホアハズの短い治世から追放、キュロスの委託までの71年間

歴代誌では、ダビデが来るべきメシアのモデルであることに焦点が当てられている。

マタイの系図では、ダビデは最も多く5回言及されている。クレイグデイビスは、さらにマタイはその系図を次のように締めくくっていると説明している。アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロン追放まで14代、追放からキリストまで14代というコメントで系図を終えている。ヘブライ語の文字は数字を兼ねており、その結果、すべてのヘブライ語には数字が付随している。ダビデの名前は14という非常に小さい数字で表せる。このことは、ユダヤ人のヘブライ語読者にとっては常識であったろうし、マタイはおそらく、イエスが次のような人物であることをさらに指し示すために、イエスがダビデの子であり、メシアであることを示すために、3回14を使ったのだろう。

<http://www.datingthenewtestament.com/Matthew.htm>

マタイは「ダビデの子」という言葉を他の福音書よりも多い10回も使っている。また、歴代誌は他のどの王よりも多くのスペースを割いている(20章)ので(ダビデについては1章半ほどしか書かれていない『列王記第一』や『列王記第二』よりも多い)。これもマタイが新約聖書の歴代誌としてイエスの福音を紹介する際にあたり、ダビデを強調したもう一つの理由である。しかし、歴代誌ではソロモンが建設者であったのに対し、今はイエスが建設者である：「言っておく。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」(マタイ16:18) 同様に、イエスはイスラエルの歴史を他の様々な側面でも再現している。

#### モーセの五書以後のパターン

モーセの五書(聖書の最初の5冊)は旧約聖書の基礎である。

詩篇を5つの書に分けたのも、この土台を反映している。5とは、5本の指を持つ手の代表である。エジプトでの10の災いのうち、第5の災いにおいてのみ「主の御手」が示されている。(出エジプト記9:3)

新約聖書のマタイの福音書は、出来事の叙述の後にイエスの教えが続くという対称的なパターンを持つ唯一の福音書である。マタイによる福音書には、モーセの五書と同じパターンの5つの特別な教えの部分がある。

マタイによる福音書の5つの教えとは...

1. 山上の垂訓 (マタイ5~7章)
2. 福音を宣べ伝えるために十二人を送り出すこと (マタイ10章)
3. 御国のたとえ話 (マタイ13章)
4. 召し出された信者のため(別名「教会」)の教え (マタイ18章)
5. オリーブ山での教え (マタイ23~25章)

これらの説教や教えの部分は、それぞれ同じようなフレーズで終わっている。最初の説教の後

マタイは、「イエスがこれらのことを言い終えられると、群衆はその教えに驚いた。(マタイ7:28)

ギリシャ語で"終わった"を意味する言葉は"sunteleo"である。"テレオ"は何かを完成させることである。

"sun"という接頭辞は、それが完全に完結していることを強調しているこの説教の後、次の4つの説教では、"teleo"という語は、その説教の部分の完了を示すためにのみ使われる。

マタイによる福音書では、次の4つの説教は「テレオ」という言葉だけを用いて、それらの説教部分の完了を示す。これら4つの説教節の終わりを示す言葉は次の通りである。

マタイ11:1、13:53、19:1、26:1にある。

さらにマタイは、イエス・キリストがイスラエルの歴史全体を体験していることを紹介している。一方

イスラエルの歴史は罪と失敗に満ちていたが、イエスはイスラエル民族がどのように生きるべきかを完璧に生き抜かれた。また、新約聖書の最初の5冊は新しいモーセの五書のようなもので、ただ順序が逆になっているだけで、使徒の働きには教会の始まりが記されているのに対し、創世記には世界の始まりが記されている。

マタイの福音書の5つの教えの部分と、それぞれに至る説明の中で、イエスはイスラエルの歴史と次のように類似させている：

1. アブラハムからの民族の誕生、エジプトから呼び出されたこと (アブラハムもそうであった) 水の中を通り抜けたこと、そして荒野で誘惑を受けたこと。
2. ヨシュアのように物理的な敵と戦うのではなく、悪霊を追い出し、人々を癒し、天の王国をのべ伝える為に敵地に入り、征服した。
3. イエスのたとえ話は、ソロモンの知恵とイスラエルの王国が確立されたあの時代と並行している。

この箇所直前、イエスはここにソロモンよりまさるな方がおられると言っている。(12:42)

4. この箇所は、イスラエルとユダの分裂した王国と、エリヤとエリシャの働きと並行している。

5. 最後の節は、(エレミヤのような) 預言者たちがイスラエルの子どもたちに、迫り来る裁きと追放を警告するのと並行してしている。

### カイアスティック構造

カイアスティックとは対称的な文学構造のことで、ギリシャ文字のX(カイ)にちなんで名付けられた。

読者をカイアスティックの中心へと導く。聖書には他にも様々なカイアスティック構造がある。例えば、創世記8章から9章にかけての洪水のタイミング(7日間、40日、150日、「神はノアを覚えておられた」、150日、40日、7日)。

マタイによる福音書も同じようなカイアスティック構造に従っており、13章はその中心で、天の御国をテーマにしている。マタイによる福音書の最初の説教部分(5章から7章)は、8つの祝福で始まる(9つを数える人もいるが、5章の10節と11節は同じ祝福の繰り返しである)。

中間の説教節(13章)には8つのたとえ話があり、「天の御国」という言葉が8回使われている。そして、最後の説教節(23章から25章)は、8つのわざわいの話題から始まる。(8つのわざわいと39節の1つの祝福)また、最初と最後の説教節は、中間の3つの節よりもかなり長い。マタイのカイアスティック構造についての詳細は後述する。

8という数字は、聖書では再出発や新しい人生を示す数字である。旧約聖書では男の子は8日目に割礼を受け、地球規模の大洪水から8人が救われ、地球に新たな始まりをもたらした。イエスは死からよみがえられた。それはある意味では週の初めの日であったが、復活の前の受難週を数えて8日目-新しい日の始まりである。ここで、「8」という数字について、少し根拠の道をたどってみよう。

詩篇119篇は、各節ごとにヘブライ語のアルファベット22文字で始まる。各セクションに8節ずつある詩篇全体を通して、律法に関連する8つの特別な言葉が繰り返し使われている。つまり中心テーマ(詩篇119:88~89)が「よみがえる」、「よみがえらされる」、「よみがえった」、「よみがえらされた」

(H2421 chayah)である。旧約聖書の中で私たちが神の口(H6310 pe)から受けるこの回復のいの(H2421 chayah)に言及しているのは、申命記8:3だけで

ある。興味深いことに、マタイは「神の口」(4:4)という言葉を使って、申命記8:3から引用した唯一の福音書である。続いてマタイの福音書5章では、「私たちとともにともにおられる神」であるイエスがこう切り出す、「そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた。」(5:2) マタイの福音書では、他の福音書のどれよりも「わたしは言う」そして、「まことにわたしは言う」という言葉を多く使っている。

#### 申命記のような祝福と呪い

祝福が宣言されたゲレジム山のように、律法を守ることに関連している。呪いが宣告されたエバル山は、裁きの預言と関連している。(申命記27~28章)

山上の垂訓(5章1~12節)の祝福には律法に関する教えが、そしてマタイによる福音書23章の神殿の山の近で呪いの言葉は、マタイの福音書24章の裁きの預言に続いている。

マタイの福音書5章は山の上であり、マタイの福音書23章も山(シオン山)にあった。

マタイの福音書13章の中間部はガリラヤの海とその近くの家で起こっている。ガリラヤの海は海拔220メートル。マタイの地理でさえ左右対称なのだ!

ところで、山上の垂訓は独善を教えるものではなく、天の父に頼ることを教えるものである(マタイ6:9~13)。それは、「心の貧しい者」と「義に飢え渴く者」のためのものである(5:3, 6)。

マタイの福音書は、偽善に対して最も警告を発している(14回)。メシアを拒む者たちは、宗教的儀式を見せているにすぎない。信仰によって謙虚にイエスのもとに来る者には、イエスは彼らに安息を与え天の御国へと導いてくださる(マタイ11:28~30、18:4、5:3~10)。

#### 神の臨在

マタイによる福音書は、ヘブライ語で「私たちとともにともにおられる神」を意味するインマヌエルというイエスの名前に言及した唯一の福音書である。(イザヤ7:14)そして、マタイは福音書の最後をイエスの言葉で締めくくっている。

「わたしは、世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28:20)。同様に歴代誌は、サムエル記や列王記よりも神の臨在を強調している。

聖書で言及されている神の臨在. . .	
第一歴代誌	第二歴代誌
4:10,9:20,11:9,13:6,17:2,22:11,22:16,22:18,28:8,28:20	1:1,3:1,7:1,7:12,13:12,15:9,17:3,20:9,20:14,24:20,32:8,35:21~22,36:15,36:23

歴代誌では、神が個人（時には集団）とともにおられることが強調されることが多い。

しかし、マタイによる福音書では、福音書全体が、イエスを通して「神が私たちとともにおられる」ことを強調している。マタイ1:23でマタイが指摘している。

旧約聖書の年代記記者は、70年の捕囚から抜け出したばかりのイスラエル人に向けて、次のように記した。ダビデ契約の成就と神殿が象徴するすべてのことを通して、神がこれから成し遂げられるであろうことに期待するようにと。彼らを励ました。マタイの福音書は、同じく「追放」(約400年にわたる預言者の沈黙と外国の支配)から出たばかりのユダヤ人たちに、天の御国を待ち望むように勧めている。

その天の王とは、神殿よりも偉大なイエス・キリストである(12:6)。

マタイは、系図のアブラハムから始まるユダヤ人のために書かれているが、イエスを信じる信仰によって

誰でもアブラハムとの約束にあずかることができる(ガラテヤ3:14,18,28,29)。

マタイは、偉大な信仰を持った二人の外国人(8:10と15:28)について、カイアスティックに語っている。

マタイは「イスラエルの神」と「イスラエルの家」について言及しているが、マタイは他のどの福音書よりも、私たちの天の父／天におられる父、天にある御国について言及している

## 五重の福音書を持つ記録者 (part 2 of 2)

本稿の第一部で述べたマタイの福音書のユニークな特徴のいくつかは、次のようなものである。

歴代誌との類似、カイアスティック構造、五書後の構造化、イエスがイスラエルの歴史を追体験している、などである。イスラエルの歴史を再現していることなどは、紙幣が偽物でないことを確認するための独特の目印のようなものである。お札に透かしや変色インク、紫外線で識別できる特徴などがあるように、マタイの福音書もまた、偽札ではないことを証明するための、独特の目印のようなものなのだ。

マタイの福音書には、神の言葉であり、旧約聖書と真正なつながりがあることを証明する、このような独特の印がある。より重要な検証は、マタイが確かに使徒的権威を持ち、その教義が健全であるということである。マタイの福音書には、このような微妙な検証記号があることは、お札にある見えにくい検証記号のように、この書物が聖霊によって驚くべき靈感を受けていることをさらに示している。

お金といえば、マタイの福音書だけが、ユダが受け取った銀貨「30枚」に言

及している。

ユダが受け取った銀貨「30枚」（元徴税人であったマタイは気づいていただろう。）モーセの律法では、これは奴隷を傷つけることの代償であった(出エジプト記21:32)。さすがに元徴税人であったマタイは、福音書の中で最も多様な金銭用語を用いている。

(chalkos G5475), (arguros G696), (chrussos G5557), (nomisma G3546), (didrachmon G1323), (stater G4715), (talanton G5007), (daneion G1156), (trapezites G5133), (emporos G1713), (emporion G1711), (daneizo G1155), (denarion G1220), (kodrantes G2835), (kensos G2778) and (argurion G694)

(ギリシャ語の単語とストロングコンコルダンス番号)(下線は4つの福音書のうち、マタイの福音書でのみ使われている単語である。)そして、マタイの福音書だけが金と真珠について語っている。

また、「主の祈り」の中で、マタイはその背景を忠実に再現し、イエスの言葉をこう伝えている。

「私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。(6:12)。

マタイの福音書だけが「負債」というギリシャ語を使っている。ルカは2番目のフレーズで「債務者」というギリシャ語を使っている。「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」(ルカ11:4) これはわずかな違いであり、もしかしたら、イエスがこのことについて教えられた2つの異なる機会について書いているのかもしれない。

しかし、興味深いのは、マタイがこのことを伝えていることだ、元徴税人であるマタイは、これを"罪"ではなく"負債"として書いている。

マタイとルカの福音書だけが、高利貸し、施し、マモン、什分の一 (tokos G5110), (eleemosune G1654), (mammonas G3126), (apodekatoos G586), そしてマタイとマルコの福音書だけが、身代金のような交換 (antallagma G465), そしてイエスが提供した身代金(lutron G3083)について述べている。

全体として、マタイが最も金銭的な用語を用いている。しかし、贖われた者として、マタイは「神と金に仕える」ことができないことを知っていた。(6:24) そして、マタイの福音書の焦点は天の御国であり、地上の富ではない。

#### 呼び出される

マタイはエジプトに言及した唯一の福音書である(4回)。マタイはまた、教会について言及した唯一の福音書でもある(3回)。ギリシャ語で「教会」はエクレスシア (Ekklesia) であり、「呼び出された者」を意味する。マタイ2:15で、

イエスはエジプトから「呼び出された」。マタイは、ヘロデが男の赤ん坊を虐殺したことに言及している唯一の福音書であり、ヘロデがパロと同じ性格の邪悪な支配者であったことを明らかにしている。モーセの時代に赤ん坊の殺害を命じたエジプトのファラオと同じ性格の邪悪な支配者であったことを明らかにしている。

そして、この時期のイスラエルは、メシアを歓迎するどころか、エジプトと同じ状態になっていた。

それゆえ、忠実な民は「呼び出される」（エクレシア）必要があった。モーセの「ような」預言者として来られたイエスは（申命記18:15）、イスラエルの代表としてエジプトから出て来られたように、人々を「エジプト」から呼び出されたのである。

### 地上と天の御国

サムエル記第一、列王記第二、歴代誌第一では、「王国の」という言葉が10回出てくるが、王国が「主」に帰属するのは歴代誌だけである（I歴代誌28:5 & II歴代誌13:8）。マタイによる福音書では、「神の国」は5回言及されている。

マタイによる福音書では、「神の国」は5回、「天の国」は33回使われている（マタイによる福音書でのみ使われている表現）。「地上の王国」に焦点を当てた歴代誌とは対照的に、イエスは「天の御国」を告げた。

### ダビデへの焦点

本稿の第1部で述べたように、マタイの系図ではダビデに焦点が当てられている、イエスは「ダビデの子」であり、ダビデの生涯が単に予見していたことの側面を成就している。二人ともベツレヘムで生まれ、二人とも王に選ばれたが、その後迫害され、追放された。ゴリアテは、悪魔がイエスを40日間誘惑したように、40日間イスラエルに挑んだ。そして、ダビデは5つの石のうちの1つを使ってゴリアテを倒しように、イエスも5冊の本のうち1冊（申命記）を使って悪魔の誘惑から打ち勝った。

ダビデとソロモンは、マタイの福音書の中で他のどの福音書よりも多く言及されている。

（ダビデは17回、ソロモンは5回）、ダビデに重点が置かれている。歴代誌第一と歴代誌第二では、ダビデは264回、ソロモンは109回言及されており、ダビデは96回、ソロモンは163回言及されている列王記第一と列王記第二とは逆の強調がなされている。

## 歴代誌とマタイの福音書におけるイスラエルの歴史の類似

歴代誌第一と歴代誌第二	マタイの福音書
I歴代誌 1 章～9章に見る系図	マタイの福音書1:1～17から見る系図
ゼブルンとナフタリは、ダビデを王にするためにヘブロンに来たと記されている。(I歴12:38～40)	ゼブルンとナフタリ地方の名として、イエスの宣教の開始時に言及されている。(マタイ4:13)
ダビデは神殿の建設準備を進めた。(I歴22～28)	イエスは12使徒を召集し、送り出すことによって、ご自身の教会を建てる準備をされる。(10:1～6)
I・II歴代誌の中心的な部分は、II歴代誌6章である。ソロモンの祈りであり、神殿の完成への祈りである。この箇所は(I歴5:14)から始まり、主の栄光が神殿を満たしているよう様子で終わる。(II歴7:1～2) 6章のソロモンの祈りでは、人々の地上の必要とは対照的である。神様に8回も『天からきいてください。』と、いのったのである。	マタイの福音書の中心的な箇所は13章で、8つのたとえ話がそれぞれ『天の御国』について語られている。この箇所は12:46～50で始まり、13:55～56で終わる。この箇所は、イエスの地上的な家族に焦点を当てることで始まり(12:46～50)、イエスのたとえ話の天井的な焦点とは対照的に終わる。(13:55～56) マタイの福音書13章は、ソロモンよりも偉大な方が臨在されたと述べた直後から始まる。(12:42)
ユダの王ヨシャファテをはじめとする他の王や祭司たちは、人々を主のもとに連れ戻すために働いた。(II歴19:4)	イエスは、ご自分が教会を建てる者であることを公言されえいる。(16:18)
神殿では、神の霊がヤハジエルを通して語られ、彼らは『聞け』と言われた。ヨシャファテとすべてのエルサレムは、顔を地につけて主を礼拝した。この後、彼らは敵を倒すという大勝利を経験した。(II歴20章) 前の章では、律法(トーラー)に立ち返ることが強調され、20章では、ヨシャファテが人々に神とその預言者を信じるようにと語っている。(20:20)	神殿で(イエスの前)、父なる神が天から語りかけ、弟子たちに『神に聞け』と告げ、弟子たちは平伏した。この後、彼らはイエスが少年から悪魔を追い出すという大勝利を体験した。(17:1～20) 旧約時代では、モーセとエリヤは法と預言者を象徴しているが、新約時代ではイエスに耳をかたむけるようにと、弟子たちは言われている。
エリヤはヨラムに裁きの手紙を書いた。(II歴21:12～15)	エリヤとモーセが栄光のイエスとともに山に現れる。(17:3～12)
ヒゼキヤは神殿をきよめた。(II歴29:18)	イエスは宮をきよめられた。(21:12～13)
ヒゼキヤはイスラエル全土に人を遣わして、またエフライムとマナセに手紙を書いて、エルサレムにある主の宮に来て、過ぎ越しの祭りを祝うように呼びかけたが、さまざまな反応があった。(II歴30章)	さまざまな反応がある結婚式の招待状のたとえ。(22:1～14)

過越の祭りは歴代誌の最後にしか出てこない（30章から35章の間に18回）。	過越の祭りは、マタイによる福音書の最後の方でしか言及されていない（26章で4回）。
神殿は破壊され、その後、この地から追放され、そして神殿の再建が命じられる。 (II歴36章)	イエスの体（神殿）は（破壊）され、短い間（追放）された後（再建）された。(28:6)

### 歴代誌における神殿の焦点

神殿／幕屋は、第一歴代誌から第二歴代誌にかけて様々な形で言及されている。(使用されている語句の後に、歴代誌に登場する回数を記す。幕屋(6), 天幕(17), 神殿(14)、主の家(94)、神の家(36)、主の宮(1)、わたしの家(1)、家を建てる(13)、建てた宮(1)、あなたの聖なる御名のために宮を建てる(1)、家を建てる(3)、わたしの名のため宮を建てる(1)、家を建てた(3)、この宮(14)、あなたの御名のために建てた家(2)、主のために宮を建てる。(2)

歴代誌第一と第二の65章に神殿と幕屋に関する記述が合計209回あり、1章につき3回強である。これはサムエル記よりもはるかに多い。ルカによる福音書も神殿に関する記述がほぼ同数あるが、マタイによる福音書がやはり最も多い。歴代誌に倣わせたことと一致している。神殿(19)、神の家(1)、私の家(1)、祈りの家(1)、あなたの家(1)

### マタイによる福音書のカイアスティック構造

マタイのカイアスティック構造はすでに述べたとおりだが、ここではもう少し詳しく説明しよう。

これらの中には、パターンに完全に当てはまらないものもあるが、それに近いものはある。そのようなものには、アルファベットの小文字を使用した。

A---イエスの系図における王としての資格

B---インマヌエルという御名におけるイエスの現存の約束 (1:23)

1. マタイ 3:17　すると、天から声がして言った。「わたしの愛する子である。わたしはこれを喜ぶ。」

C---三つの誘惑に打ち勝つ

D---山で語られた8つの祝福(5章)

a---大きな信仰を持った外国人 (8:10)

b---海の向こう側に来た (8:28)

E--二人の盲人が、イエスを「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫びついて来て癒された。  
(9:27~31)

F--弟子たちを指導しながら、父なる神について4回言及し (10章)  
父の臨在の約束 (10:38)  
c--十字架を負ってイエスに従う (10:38)

G--獄中のバプテスマのヨハネ (11:2)

2. マタイ12:18 「見よ。わたしが選んだわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの愛する者。  
わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は異邦人にさばきを告げる。」

d-- ヨナのしるしだけを与えられた悪しき世代(12:39)

H--イエスの母と兄弟についての言及 (12:46-50)

I--8つのたとえ話、それぞれが天の御国について言及し、海面下で語られた(13)

H--イエスの母と兄弟についての言及 (13:55~56)

G--獄中のバプテスマのヨハネ (14:3)

a--大きな信仰を持った外国人 (15:28)

d-- ヨナのしるしだけを与えられた悪の世代 (16:4)

b--海の向う側に来た (16:5)

c--十字架を負ってイエスに従った (16:24)

3. マタイ17:5 イエスがまだ話しておられ間に、見よ、光り耀く雲が彼らをおおった。すると見よ、雲の中から  
『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け』という声がした。

F--4回、父なる神について言及され、弟子たちを指導し、(18章)

そして、二人または三人が集まるところには、イエスがおられるという約束 (18:20)。

E--二人の盲人が癒され、イエスを「ダビデの子」と呼び、憐れみを求める。(20:29~34)

D--山で語られた8つのわざわいの言葉 (23章)

C--三つの誘惑に打ち勝つ

B--イエスの臨在の約束

A--復活し、すべての権威を持つイエスの王としての資格。

マタイは福音書の中で唯一(12:18~21)、神が「よく喜ばれる」「愛する者」がイザヤ42:14からきていることを指摘している。イエスに関する漸進的な啓示を与えている。まずマタイ3:17で、次に12:18~21で、最後に17:5で、「彼の言うことを聞け」という言葉を付け加えている。また、もしマタイが当初ヘブライ語で書かれたのであれば、これもまた、イエスが「ヘブライ人」であることを指し示す別の方法であったろう。ヘブライ語で「ダビデ」は「愛する者」を意味するからである。

#### パリサイ人と律法学者の義を超える

山上の説教の中で、イエスは人々に言われた。「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入ることはできません。」(5:20)

パリサイ人や律法学者の義とは、果たしてどのようなレベルのものだったのだろうか。彼らはある種のモーセの掟を二次元的にとらえ、それさえもしばしば歪め、自分たちの作ったその律法さえも歪曲していた。マタイによれば、彼らは殺人を犯し(12:14)、安息日を誤解し(12:2)、冒瀆し(9:34と12:24)、偽善的であったためにイエスの強い叱責を受けた。偽善的であり、「律法のより重視しなければならないこと」を無視し、「貪欲と自己中心」に満ち、「すべての汚れに満ちていた」(23:13~27)。バプテスマのヨハネはサドカイ人とパリサイ人を「毒蛇の群れ」と呼んだ！(3:7)イエスは律法学者たちやパリサイ人たちのことを「彼らはいうだけで実行しない。」と言っている。(23:3)

聖書の知識があるにもかかわらず、ほとんどの律法学者とパリサイ人は、自分たちのメシアを認めず、むしろ、彼らたちは、真理に対して(27:62~64& 22:15)陰謀を企てた。彼らや先祖たちが他の預言者たちを拒み、殺したように(23:29~31)

彼らの教義について、イエスは弟子たちに言われた。パリサイ人たちやとサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心なさい」(16:6)。弟子たちは、イエスが語られた「パン種」がパリサイ人とサドカイ人の誤った教義であることを正しく推測した。そして、彼らは「パン種」に気をつけなさいと言われたのではなく、パリサイ人とサドカイ人の教えに気をつけなさいと言われたのだと理解した。(16:12)パン種は小さな材料だが、素早く膨れ上がり広がる。

律法学者やパリサイ人たちの「義」の全体像を見ると、それは実際には全くの「不義」であった。律法学者やパリサイ派の人たちは、神聖であるという評判を持っていた。それはうわべだけの信心深さであった。イエスの説教は、次のようなものだった。律法学者やパリサイ人の「義を超える」ようにと呼びかけた後のイエスの説教は、内面的な義への呼びかけであった。心からの義への呼びかけである。そして、マタイの福音書5章20節での御言葉の前にあったのは、「心の貧しい者は幸いである」(5:3)から始まり、神への謙虚な依存を持つ。神が求めておられるのは、パリサイ的な「独善」ではない。私たちの信仰は律法を完全に成就された唯一の方であるイエスを信じることである。

使徒パウロは、次のようにはっきりと語っている。「私は、彼らが神に対する熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。(ローマ人への手紙10:2~4)

イエスはモーセの掟を实践された。律法学者やパリサイ人たちのような二次元的で歪んだ見方ではなく、言葉、考え、行いにおいて三次元的に、イエスはモーセの掟を实践された。父なる神への愛と人々への愛によって、律法を完全に体現されたのである。(22:36~49)

マタイによる福音書では、「正しい」「義」という言葉が他のどの福音書よりも多く使われている。マタイの福音書には、次のように書かれている。「義に飢え渴く者は幸いです。」(5:6)、「義のために迫害されている者」(5:10)、「人前で自分の義を行わないように」(6:1)、「まず神の国と神の義を求めなさい」(6:33)、「そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます」(13:43)、「外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。」(23:28)、「正しい者が最も小さい者の一人に祝福することは、イエスを祝福することである。」(25:37~40)「こうして、この者たちは永遠の刑罰にに入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。」(25:46)

文脈上、マタイは「独善的な義」を説いているのではない。義に飢え渴く人々だからだ。つまり、彼らはまだその理想に完全に到達していないのだ。しかし、このような「心の貧しい」、神に依存する人々にとって、天の御国は理想的なものなのだ。天の御国は彼らのものであるという観点から、彼らは「義人」と呼ばれる。

### 結論

歴代誌は、イスラエルの民が70年間のバビロン追放から帰還した後に書かれた。決して彼らの歴史は終わったのではない、と励ますために書かれた。問題は、「これからどうするか？」だった。エルサレムと神殿は再建されなければならなかったが、それ以上に、メシアの成就への期待があった。申命記(Deuteronomy-“deuteros”ギリシャ語で第二の・“nomos”はギリシャ語で法律の意味)が若い世代のための律法の再話であり、歴代誌が流浪の民から出てきた世代のためのイスラエルの歴史の再話であったように、イエスはご自身の生涯においてイスラエルの歴史を体験され、私たちには決して成し得なかった旧約聖書の律法を完璧に成就してその歴史を完成され、今、新約聖書において私たちを導いてくださる信じるべき救い主を与えてくださったのである。

マタイによる福音書は、歴代誌とモーセの五書に基づいて書かれた。特にユダヤ人たちに、イエスが王であることを勧めるために書かれた。マタイの福音書は、歴代誌と五書紀に倣って書かれた。問題はまた、「今、何をしなければならないのか？」ということだった。イエスは、ある人々が期待していたような地上の王国を設立されたわけではない。イエスは天の御国を打ち立てたメシアでありダビデの子の血筋に連なる預言の成就者である。

聖書の文学的な美しさと壮大さを発見するとき、私たちはマタイ24章1節に登場する弟子たちのように、神殿の外見的な壮大さには感銘を受けたものの、神殿が指し示す霊的現実を見逃していたにかもしれない。自分たちとともにおられるお方、イエスが神殿よりも偉大なお方であることをまだ十分に理解していなかったのだろう。私たちもまた、マタイによる福音書のカイアスティックパターンを見るのは驚くべきことだが、次のことを覚えておく必要がある。マタイによる福音書、歴代誌とモーセの五書による福音書のパターンを一つの福音書で見るとは驚くべきことだが、このすべてがイエスを指し示しているのだ。私たちは、弟子たちのように石の美しさだけを見て、イエスとの交わりをおろそかにしてはいけないのである。その神殿が指し示しているお方との交わりをないがしろにするようなことがあってはならない。天地創造の美しさ、聖書の中の美しさ、旧約聖書の影の中の美しさは、それ自体が目的なのではない、救い主イエスを指し示しているのである。マ

タイの福音書やその他の聖書を学び、主に近づき、聖書から学んだことを私たちの生活に適用するとき、主に栄光が帰される。(マタイ7:24)

## マタイによる福音書に対応する中間章 (part 1 of 2)

前の二つの記事（マタイ：五重の福音書を持つ記録者—その1と2）で、マタイがマタイの福音書をモーセの五書と歴代誌第一、歴代誌第二に倣って書いたことを見てきた。(ユダヤ的には、歴代誌は一冊の書物である。)

テーマと構成において、歴代誌第二6章は歴代誌の中心である。その章では地上の王であるソロモンは、「天から聞いてください」と神に8回も願い出ている。マタイによる福音書13章は明らかにマタイの福音書の中心的な章である。「天の御国」に8回も言及し、人々に聞くことを求めている。また、歴代誌第二6章とマタイによる福音書13章は、専門用語で言えば、カイアスティック構造である。

各章の「上」と「下」にそれぞれ対応するトピックが「鏡のように」配置され、最終的に「鏡のように」配置された「上」と「下」の中間にある「中心点」で頂点に達する。「カイアスティック」の語源であるギリシア文字「カイ」の「砂時計(X)」の midpoint で頂点に達する。マタイによる福音書13章では、その中心点は詩篇78篇とイエスのたとえ話を用いている。歴代誌第二6章では、地上の願いが強調されている。これらのリクエストは8つあり、その中心点である4番目と5番目の願いは、いずれも神からイスラエルに与えられた物理的な土地について語っている。そして、天から聞こえてくる神の声。神の道を歩むこと、(II歴代誌6:27;31)そして、神が天から聞かれること。

歴代誌の中で、ソロモンは神に「天から聞いてほしい」と懇願している。

「それにしても、神は、はたして人間とともに地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。(II歴代誌6:18)しかし、マタイの福音書13章では、立場が逆転している！地上の王が天の神に嘆願するのではなく、万物の上に立たれる王である神ご自身が、地上の人間と共に住まわれてそして、人類に聞くよう求められるのだ。もちろん、私たちは天にいる神に祈りを聞いてもらいたい。天の御国についてのメッセージに耳を傾けるようにと！そして、マタイでは、聞くだけでなく、理解することが強調されている。

マタイの福音書13章のたとえ話の前後には、人々がイエスを誤解している場面がある。

イエスは誰なのか、イエスの家族は誰なのか。その人たちは、肉体的なもの

だけを見ていたのであって、霊的なものを見ていたのではないのだ。(マタイ 12:46~50と13:53~58)。第二歴代誌6章の前後には、歴代誌第二5:11~14があり「主の栄光が神の宮に満ちたからである。」と語られている。「主はまことといつくしみ深い。その恵みはあとこしえまで」と引用されている。歴代誌第二7:1~3も同じ箇所を引用し、「主の栄光がこの宮に満ちたからである。」と述べている。

マタイによる福音書12章では、イエスは神殿や安息日、ヨナ、そしてソロモンよりも偉大であると述べられている。(12:6、12:8、12:41、12:42)。続いて、その偉大なお方が登場する、イエスは、天の御国の王であり、神殿よりも偉大である。この王国について8つのたとえを語っている。歴代誌第二6章は、地上の神殿が廃墟となった後、神が天から聞いてくださるよという8つの願いである。地上の神殿が完成した後、神が天から聞いてくださるよという8つの願いである。

マタイの中心は13章ではないが、それに近い。詩篇の中心は詩篇78篇ではないが、それに近い。

歴代誌の中心点は歴代誌第二の6章ではないが、それに近い。第一歴代誌は29章、歴代誌第二は36章で構成されているので、ページ数で言えば中心になるのでそう遠くはない。

モーセの五書のページ数による中心点はレビ記8~9章ではないが、やはりそれに非常に近い。

これらの書物の中心について重要なのは、単語数やページ数を数えて正確な物理的な中心を見つけるのではなく、テーマ的な中心を見つけることである。レビ記では完成した幕屋と聖別された祭司たち、歴代誌では完成した神殿、そして神殿や幕屋のよりも偉大なお方(そして、私たちの大祭司であり王でもある方が、地上に来て私たちの間に住まれ、私たちが聞き、理解する必要があることを指し示し、神が私たちに耳を傾けてくださるよという地上の王の嘆願をほめたたえるものである。

#### 五書における砂時計構造

モーセの五書にも、いくつかのカイアスティックパターンがある。以下の表では、モーセの五書(G=創世記、E=出エジプト記、L=レビ記、N=民数記、D=申命記)における幕屋や祭司職などに関連する主要語の分布について比較している。また、マタイの福音書は歴代誌に倣っているため、歴代誌(CH)と列王記(K)歴代誌の大部分は列王記に倣ったものであることを予測している。

歴代誌の方が列王記よりもこれらのキーワードが多く使われていることが予

測される。これらの検索する中で、エゼキエル書（EZ）がかなりの数で表示され続けたので、これらもここに含めた。また、創世記や申命記には出てこないが、「エゼキエル書」には出てくる例もある。

また、創世記や申命記には出てこないが、中間の3つの書物には「カイヤスティック的」にキーワードが出てくる例もある。例えば「幕屋」（H4908 mishkan）という単語は、創世記にも申命記にも出てこない。しかし、この単語は出エジプト記に58回、レビ記に4回、民数記に42回登場する。幕屋は、エデンの園のように、人間が再び神と和解できる場所である。創世記では代わりにエデンの園が語られ、申命記では民が約束の地に入る準備をしている。カッコ内はストロング数、ヘブライ語の読みを示している。

単語または単語の組み合わせ	G	E	L	N	D	K	CH	EZ
契約(H1285 beriyth)	27	13	10	5	27	26	30	18
任命；集会；祝祭 (H4150 moed)	4	38	49	65	4	3	12	5
イスラエルの子ら	5	122	54	171	20	32	26	5
栄光 (H3519 kabod)	3	11	2	7	1	2	17	19
重い、名誉 (H3513 kabad)	3	10	1	6	2	3	8	0
主に幕屋や雲や神の御名が神の民と共に住む。 (H7931shakan) “shakainah glory” 「神の栄光」という言葉はこの言葉が語源である。	8	5	1	10	11	2	3	6
雲 (H6051 anan)	4	20	2	20	5	2	2	11
贖罪；覆い (H3722 kaphar)	2	8	49	16	3	0	3	6
最も聖なる—qudesh qudesh 聖なる(H6944 qudesh)を二度続ける。	0	7	13	5	0	3	7	7
香り (H7004 qetoreth)	0	19	5	21	0	0	7	3
イスラエルの家 福音書の中では、マタイの福音書だけがこの言葉を使用している。	0	2	5	1	0	2	0	83
幕屋 (H4908 mishkan)	0	58	4	42	0	0	8	2
天幕、しばしば幕屋 (H168 ohel)	23	62	44	76	9	16	23	1
天幕 (H168 ohel) と栄光 (H3519 kabod) 共に使う	0	2	1	4	0			0
栄光 (H3519 kabod) と家 (H1004)						1	4	7

bayith) 共に使う								
雲 (H6051 anan) と覆う (H3680 kasah)共に使う	0	3	1	3	0			4
荒野 (H4057 midbar)	7	27	4	48	19	5	11	15
祭司 (H3548 kohén)	7	11	194	69	14	73	108	24
「アロン」と「息子たち」	0	66	104	54	0	0	39	0
八日目	0	1	9	3	0	1	2	1
種なしパン	1	11	4	4	3	1	4	4
いけにえに関係する脂肪 (H2459 cheleb)	2	6	48	6	3	1	4	4
全焼のささげ物 (H5930 olah)	7	17	62	56	6	17	43	20
七日目	6	11	27	10	4	5	10	9
聖所 (H4720 miqdash)	0	2	9	5	0	0	7	3

これらの図式は完全な対称ではないが、かなり近い。興味深いのは「アロン」という単語が「息子たち」という単語と一緒に出てくるのは、モーセの五書と歴代誌の真ん中の三書だけで、他にはどこも出てこない。

モーセの五書と歴代誌にしか出てこない。「八日目」という表現は、五書三部中書（聖書全体では21回のうち、レビ記では9回）、歴代誌では2回しか出てこない。

歴代誌に2回、列王記、ネヘミヤ記、エゼキエル書にそれぞれ1回ずつである。

### 黙示録とエゼキエル書

旧約聖書の単語を検索していると、エゼキエル書が何度も出てきた。エゼキエル書には、モーセの五書と歴代誌に共通する単語がたくさん出てくる。そこには9:3, 10:4, 18~19, 11:22~23, 43:4~5, 44:4。マタイが福音書を歴代誌やモーセの五書から模倣したように、ヨハネの黙示録もエゼキエル書から模倣されている。しかし、それはこの記事とは別の話題である。新約聖書がこれらの旧約聖書と呼応していることは驚くべきことではない。新約聖書がこれらの旧約聖書のテーマと呼応しているのは、イエスの旧約聖書の成就に照らしてではあるが、驚くべきことではない。旧約と新約聖書の著書は全能なる神様なのであるから。

### モーセの五書の中心

何人かの聖書研究著者によるモーセの五書のカイアスティック・アウトラインを見ると、レビ記16章を中心とするものもあれば、出エジプト記25章から40章を中心とするものもある。それらを慎重に研究した結果、私はモーセの

五書の中心はレビ記8章から9章である。この2つの章は8日間の期間をカバーし、出エジプト記40章と関連している。

レビ記8章から9章がモーセの五書の中心であると考えられる理由は以下の通りである：

1. マタイによる福音書は5部構成になっており、5つの主要な説教に基づいている。マタイによる福音書は5部構成になっている。そうであれば、モーセの五書の中心は出エジプト記ではなく、レビ記にあるはずだ。出エジプト記40章には、第二歴代誌5~7章と類似した箇所がある。しかし、出エジプト記40章は8日間の出来事の最初の日であり、レビ記8章から9章にはるかに多くの類似点がある。
2. レビ記16章は、贖罪の日がどのように行われるかを未来形で規定している。レビ記8章から9章のように、現在の出来事についての記述ではない。さらにレビ記9:7では、現在形で民のための贖いがなされている。
3. 「天の御国」が8回も出てくるマタイの中心章も、「天から聞いてください」と神に8回も頼む歴代誌の中心章（II歴代誌6章）は、どちらも中心であることを明確に示している。一方では、人が神に「天から聞いてください」と頼み（歴代誌の中心テーマである神殿の完成時）、もう一方では、(神殿よりも偉大な)神が地上に降りてきて、人々に聞くように求める。幕屋がモーセの五書の中心にあることは、神が人類との関係を再構築することと矛盾しないように思われる。エデンの園で失われた人間との交わりを、神が再び築かれたのである。歴代誌では神殿が和解の場でありマタイの福音書では、神ご自身であるインマヌエルの神が、人々を天の御国に導くために地上に来られる。レビ記では幕屋が中心なのである。
4. 聖書の原本には章や節が記されていない。原本を考慮するとレビ記8章から9章を一つの「章」として、モーセの五書の中心に置いている。そして、歴代誌第二5章の終わり、6章、そして歴代誌第二7章の始まりを、統一された中心として見ている。
5. 幕屋が初めて設置され(出エジプト記40章)、祭司が聖別され、モーセとアロンが幕屋に入るまで(レビ記8~9章)と歴代誌第二5章から7章における神殿の完成と奉献を比較すると、少なくとも11回の類似点が見られることがわかる(下記表示)。これらの類似点の2つの顕著な例外は、出エジプト記40章からレビ記9章までは過越の祭り(第一の月)の前であり、歴代誌第二5章から7章までは仮庵の祭り(第七の月)の前であること、レビ記9章ではモーセとアロンは幕屋に入ったが、歴代誌では、神の栄光が神殿を充満していたため、神殿に入ることができなかったことである。

第1の月:10日目に子羊を取り、14日目にそれをいけにえに捧げ、1日から7日

目は仕事はせず、14日から21日まで種なしパンを食べる(出エジプト記12:1~19)。レビ記8章は、アロンとその息子たちの7日間の任職期間である。これはまだ第1の月である。レビ記9章は、過越の小羊を取る2日前の8日目から始まる。レビ記には過越の祭りが祝われたという記録はない。それは民数記9:1~5にある。

第7の月:1日は休息日であり、ラッパによって宣言された。贖いの日は10日で、9日と10日は働いてはならない。15日目に仮庵の祭りが始まり、22日まで7日間続く。この祝日の1日目と2日目は仕事をしない。(レビ記23:23~44)。

すべての類似点が一致しているわけではない。例えば、レビ記9章の8日目は過越の祭りの前ですが、歴代誌第二7章の8日目は仮庵の祭りの最終日である。それにもかかわらず、2つの別々の箇所ではこれほど多くの類似点を見つけるのは難しい。そして、この関係は、神の御手が両方の出来事を鼓舞し、聖書がその出来事を記録しているからだとは私は信じている。

出エジプト記40章～レビ記9章	歴代誌第二5章～7章
幕屋は完全に組み立てられた。(出40:33)	神殿の建設が完了した。(5:1)
箱は幕屋に運び入れられた。(出40:20~21)	契約の箱は幕屋から神殿に運び入れられた。(5:7)
雲が現れ、主の栄光が幕屋を満たした。モーセは幕屋に入ることはできなかった。(出40:34~35)	雲が現れ、主の栄光が神の家を満たした。祭司たちは立って仕えることができなかった。(5:13~14)
イスラエルの長老たちについて言及。(レビ9:1)	イスラエルの長老たちについて言及。(5:3~4)
モーセとアロンは民を祝福した。(レビ9:22~23)	ソロモンは民を祝福した。(6:3)
主の栄光がすべての民に現れた。(レビ9:23)	イスラエルのすべての民は、神殿の上に主の栄光をみた。(7:3)
火が主の前から出て来て全焼のささげ物を焼き尽くした。(レビ9:24)	主(天)から火が下って来て、全焼のいけにえを焼き尽くした。(7:1)
民はみなそれを見て叫び、ひれ伏した。(レビ9:24)	彼らは顔を地面につけてひれ伏し、主をほめたたえた。(7:3)
八日目(レビ9:1)	八日目(7:9)
いけにえのための、全焼のささげ物、交わりのささげ物、肉のささげ物、脂肪の	いけにえのための、全焼のささげ物、交わりのささげ物、肉のささげ物、脂肪の

ささげ物 (レビ9:17~21)	ささげ物(7:7)
レビ記8章では、アロンとその息子たちを祭司に任命するために7日間の奉獻期間が設けられている	第二歴代誌7:9には、神殿の祭壇と祝宴の奉獻期間が7日間とある。

また、「天からこれを聞き」という言葉が8回(II歴代誌6章)、あるいは「天の御国」が8回 (マタイ13章) 出てくる。というのも、「天」という言葉はレビ記に一度、しかも否定的な文脈でしか出てこないからだ。「わたしは、自分の力を頼むあなたがたの思い上がりを打ち砕き、あなたがたの天を鉄のように、あなたがたの地を青銅のようにする。」(レビ記26:19)。

しかし、人間が神と和解し、神と交わることができる場所である幕屋が中心テーマであるためレビ記8章から9章にかけて、「会見の天幕」(ESV)、または、「会衆の幕屋」(KJV)が7回言及されている。興味深い。そして、「幕屋」(ESVとKJV-H4908 mishkanでは同じ語)は、一度だけ語られている。(レビ記8:10)が1回、合計8回幕屋について言及されている。7回は天幕を意味する一般的なヘブライ語(H168 ohel)を用い、1回はより具体的な語である「ミシュカン」である。そして、これらの出来事は、8日間に起こった！詩篇119篇が、22文字のヘブライ語のアルファベットに従って、アクロスティックスタイルで書かれているのは、そのためかもしれない、各段ごとに各文字の8節が与えられている。ところで、詩篇119篇の最後の節で詩篇の作者は自分自身を、神を求める「失われた(滅びる)羊のようにさまよっています。」と呼んでいる。この「失われた羊」という表現は、マタイの福音書に二回(10:6と15:24)、エレミヤ書に一回(50:6)でてくる。他のいくつかの聖書では、他の表現が使われているが正確な「失われた羊」という言葉は使われていない(イザヤ53章とルカ15章)。

聖書はなんと素晴らしい書物なのだろう！簡素なメッセージはすでに力強い。しかし、中心的なテーマを指し示す文学的構造を見るとき、そして、神がそのメッセージをいかに複雑に織り込んでおられるかを見るとき、聖書はなんと素晴らしい書物なのだろう。モーセの時代から使徒たちに至るまで、神がさまざまな著者を用いて、神のメッセージをいかに複雑に織りなしてきたかを知るとき、それは本当に驚くべきことである。パズルのピースが並び、美しい絵が浮かび上がってくる。インマヌエルであるイエスは、御自身との交わりに召され、私たちが聞き、理解するために、私たちに指し示すのである。

## マタイの福音書に対応する中章 (2/2)

### イエスは詩篇78篇を指し示された

これまでマタイ福音書とモーセの五書、歴代誌との関係、そしてそれらの中間章を見てきた。私たちはマタイの福音書中章(13章)では、イエスが詩篇78篇を指さしているのを見ている。この旧約聖書の引用は、マタイによる福音書13章のカイアスティックの中心にある旧約聖書の引用(詩篇78篇2節)は、イエスがたとえで語られたことに関するものである。詩篇は全150章から構成され、それを5つのセクションに分けることができる。第1セクション1~41章、第二セクション42~72章、第三セクション73~89章、第4セクション90~106章、第5セクション107~150章となる。詩篇78篇2節はその3番目のセクションにあたる。モーセの五書やマタイの福音書のように、詩篇は5つのセクションから構成されている。

モーセの五書の半ばは過越の祭りに関連し、『歴代誌』の半ばは仮庵の祭りに関連する。この二つの祭りは、エジプトからの脱出を思い起こさせるものである。詩篇78篇もまた、出エジプトについて非常に直接的に語っており、幕屋と神殿についての節がある。詩篇78篇は、詩篇の中でエジプトについて最も多く語っている。(詩篇全体で15回中3回)。また、マタイの福音書は、エジプトについて書かれた唯一の福音書である(4回-すべて2章)。この 記事中の数字はストロングの参照番号である。

ギリシャ語の単語はG####、ヘブライ語の単語はH####で表します。以下はマタイの福音書13章に登場するイエスのたとえ話を、砂時計型(キアスティック)に並べたものである：

- 1-種まきのたとえ...神のことばについて (G4920 "suniami" 理解する)
- 2-雑草のたとえ...善と悪が一緒になっている (世の終わり/時代)
- 3-からし種のたとえ...一つの種
- 4-パン種のたとえ...隠れたパン種 「それは、預言者を通して語られたことが、成就するためであった。「私は口を開いて、たとえ話を、世界の基が据えられたときから隠されていることを語ろう。」 (マタイ13:35)  
「私は口を開いて、たとえ話を昔からの謎を語ろう。」 (詩篇78:2)
- 5-隠された宝のたとえ...隠された宝
- 6-高価な真珠のたとえ...一つの真珠
- 7-網のたとえ...善と悪が一緒になっている (世の終わり/時代)
- 8-学者のたとえ...神の言葉について (G4920 suniami 理解する)

### 詩篇78篇の構造

8節からなる序詩の後、詩篇78篇は大きく2つの部分から構成されている。イスラエルの出エジプトの歴史の復習(9~39節と40~72節)である。それぞれの見直しでは、イスラエルの反逆が強調され、神の怒りが続くが、最終的には神の恵みが強調される。

v.	詩篇78:9~39...出エジプト史の最初の復習
9	弓の矢 (H7198 qesheth) のように「退却した／それてい行った」 (H2015 haphak) (57参照) エフライムは戦いの日に引き返した (67参照)
10	彼らは神のさとしを守らなかった (56参照)
11	神の御業も神の奇跡も忘れた。 (42参照)
12	神がエジプトでしるしをツォアンの野で奇跡を行われたことも忘れた。 (43参照)
13	彼らの敵は、海 (H3220 yawm) が覆い隠した。神が民を安らかに導かれたからである。 (53参照)
14	昼は雲柱が、民を導き (H5148 naha) 夜はずうっと日の柱が、民を導いた。 (参照53)
15	神はイスラエルに水と食物を与えられた。 (15~16;23~29)(44参照)
17	逆らったとは、ヘブル語で神に荒野で逆らった (H4784 marah) という意味もある。 (40参照)
28	自分の欲望に取り囲まれ、神の怒りを買う (29~31)結果となった人々の住まい／幕屋 (H4784 marah) と、神の住まい(60)は対照的である。
31	イスラエルへの怒り (H639 af) (49参照)、彼は彼らの中で最も強い者を殺し、イスラエルの若者たちを賤しめた。 (51参照)
35	彼らは、神が彼らの岩であり、いと高き神が彼らの贖い主であることを思い出した。 (39参照)
38	神はイスラエルを贖い／赦された(H3722 kaphar) (67~72参照)
39	神は、彼らが肉にすぎず、吹けば戻らない風であることを。 (35参照)

V.	詩篇78:40~72...出エジプト史の復習第二
40	神に逆らったとは、ヘブル語で神に荒野で逆らった (H4784 marah) という意味もある。 (17参照)
42	彼らは神の御手の業も、神が彼らを救い出された日も思い出さなかった。 (11参照)
43	神はエジプトでそのしるしを行い、またツォアンの野でその奇跡を行われた。

	(12参照)
44	神はエジプトで水と食物を取り去られた。(44～48) (15参照)
49	エジプトに対する怒り(H639 af) (31参照)
51	エジプトの初子をことごとく打ち殺された。(31参照)
53	主は彼らを安全に導かれたが(H5148 naha) (14参照)海(H3220 yam)は彼らの敵を圧倒した。(13参照)
56	そのさとしを守らず。(10参照)
57	弓(H7198 qesheth)の矢のようにそれって行った。(H2015 haphak) (9参照)
60	御住まい／幕屋(H4908 mishkan)、しかし、神はイスラエルの不信仰(57～58)のため、その幕屋を捨てられた。(イスラエルの宿営／mishkan 28 参照)
67	エフライム族を選ばれなかった。(参照9)
69	聖所(H4720 miqdash) 68～72節は、聖所においても、ダビデを指導者としてあたらえたことにおいても、イスラエルに対する神の憐み深い備えについて語っている。(38参照)

#### 詩篇78篇の独自性

詩篇78篇が他のどの詩篇よりも多く用いている言葉は、エジプト、ツォアン、天幕(H168 ohel)、イスラエル、ヤコブ、嗣業、導かれた／導かれた、荒野(H4057 midbar)、分割された。(H1234 baqa-海を分割して彼らを水から守ることを指すし、そして、岩を割って彼らに水を飲ませること)、打たれる(H5221 nakah-岩、長子、そして、敵を打つことを指す)、「神を試みる」試みる(H4057 nasah)、エフライム、反逆挑発、怒り/怒り(H639 aph)、部族(H7626 shebet)、いと高きお方(H5945 elyon)、選ばれた(H977 bachar)、そして来るべき後の世代を指す。(H1755 dor と H314 acaryon)

詩篇78篇は、祭司について言及した5篇の詩篇のうちのひとつである。詩篇78篇、99篇、110篇はそれぞれ1回、詩篇132篇は2回、祭司について言及している。他の詩篇では、祭司に言及していない。また、詩篇78篇は律法(torah)についての言及が2番目に多く、3回言及している。詩篇119篇は25回使用されている。詩篇全編では合計36回使用されている。

詩篇78篇は、譬え(H4912 mashal)という言葉を使用した4篇のうちの一つであり、他にたとえが使用されている箇所は詩篇4篇、49篇、69篇がある。そして重要なことに、詩篇78篇は、モーセの五書の中心的な章(レビ記8～9章)に4回出てくる言葉である「赦し」(H3722 kaphar)ということばを使用した、たった三篇(65篇、78篇、79篇)の詩篇のうちの一つであるということだ。詩篇78篇は、マナとシロという言葉が使われている唯一の詩篇である。詩篇78篇は、アサフによる2篇の訓戒詩篇(マスキル詩篇)のうち的一篇に過ぎ

ず、もう一篇は詩篇74篇である。また、詩篇78篇は、「聖所」(H4720 miqdash)が使われている五篇のうち的一篇であり、他の4篇は68篇、73篇、74篇、96篇である。詩篇78篇は、詩篇の中で三番目に祭司(H3548 kohen)とイスラエルを導いた雲(H6051 anan)に言及した唯一の詩篇である、この言葉はモーセの五書と歴代誌の中編で使われている。

ヘブライ語の「建てる」(H1129 banah)は、詩篇合計150篇中3回だけ登場する。一度は詩篇78篇で、他詩篇73篇と89篇である。神がご自分の聖所(H4720 miqdash)をシオンに建てられたことについて書かれている(68~6節)。詩篇89篇では、御恵みが打ち立てられることについて一度(89:2)、詩篇89篇4節では、ダビデの王座が打ち立て上げることについて一度。この言葉は、ソロモンが神の家を建てたという歴代誌第二6章に非常によく出てくる。モーセの五書の間には出てこない。幕屋は建てられたのではなく、「組み立てられた」のである。この言葉は、詩篇78を独特なものにしているもう一つのポイントであり、この言葉が聖所の文脈でこの単語が使われているのは、詩篇第3篇の中で唯一である。

これらのことから、詩篇78篇は中心的な詩篇として非常にふさわしいと思われる、マタイによる福音書の中心的な説教であるマタイによる福音書13章のイエスの教訓的なたとえ話と関連している。

全体として、この詩篇には、出エジプトの文脈の中でイスラエルの神への反逆が強調されているが、神が彼らの罪を赦し(38)、神が住まわれる場所であるシロを見放し(60)、シオンに聖所を建てる(68~69)という明確な焦点もある。

そして、神がダビデを指導者として与え、手腕と誠実な心で彼らを導くという前向きな展望がある。ダビデは、ご自分の民を導く完全な良き羊飼いであるイエスを予見している。

#### 詩篇第3セクション中心的ユニット (74~79章)

詩篇74篇と79篇は、詩篇の第三セクション中で「ブックエンド-本立て」の役割を果たしている。この6篇(74~79)のユニットは詩篇第三セクションの17篇(73~89)の中で、神の住まいという共通のテーマを中心としている。詩篇74篇と79篇はともに、神殿や聖域が敵や外国人によって汚されることについて述べている。どちらの詩篇も「あなたの牧場の羊」という表現を使っているが、このフレーズを使った詩篇は第三セクションの中で唯一である。両詩篇とも「神のゆずりの地」を意味する(各詩篇に1回ずつ)。第三セクションの詩篇で「神のゆずりの地」に言及しているのは詩篇78篇だけで、この言葉を2回使っている。

	詩篇74		詩篇79
1	あなたの牧場 (H4830) の羊 (H6629)	1	神よ、国々はあなたのゆずりの地 (H5159)に侵入し、あなたの聖なる (H6944) 宮を汚し(H2930)ました。
2	あなたからのゆずりの地(H5159)；あなたの住まい (H7931)であるシオン (H6726)の山(H2022)	2	
7	あなたの聖所(H4720)に火を放ちあなたの御名の住まい(H4908)をその地まで汚し(H2490)ました。	7	
13		13	あなたの牧場 (H4830) の羊 (H6629)

この二つの「ブックエンド」詩篇は、詩篇78篇とはテーマが正反対である。神の住まいが外国人や敵によって汚されることを語るのではなく、神の聖所を築くことを語る (74篇と79篇)。第3セクションには他にも注目すべき詩篇がある、神の聖所／住まいについて語る詩篇は、73篇、80篇、84篇、87篇などである。しかし2つの「ブックエンド」は、この6つの詩篇が特別な部分であることを示しているようだ。そして、イエスは詩篇78篇への言及は、この6つの詩篇の中で、その詩篇が特別な場所であることを示している。

聖所は、個の中心的なユニットの中で、「神が住まわれるシオン山」(住まわれるという意味のヘブライ語はH7931 shakan)など、様々な形で言及されている。もう一つの重要な単語はヘブライ語で聖所 (H4720 miqdash)。また、幕屋や住まいを意味する言葉は主に神の幕屋に使われるが、人々の住居を指すこともある(H4908 mishkan)である。“Mishkan”は上記の”shakan”(H793)から来ている。また(H168 ohel)も神の幕屋を指すことが多いが、人々の住居を指すこともある。そのため、その単語の文脈を見なければならない。もちろん、ヘブライ語で神殿 (H1964 heykal) は神の住まいを指す。詩篇76篇では、旧約聖書ではほとんど使われない二つの言葉が使われている。小屋または幕屋 (H5520 sok-旧約聖書で5回使用)、そして避難所または住まいである。(H4585 meonah-旧約聖書で9回使用)、これらはシオン山の文脈にあり、サレムという言葉を通してメルキゼデクとの祭司的なつながりがある。

#### 「ブックエンド」内の神の住まいに関する8つの言及

1	...あなたの住まいであるシオンの山 (H7931 shakan)	詩篇74:2
2&3	あなたの聖所(H4720 miqdash)...あなたの御名の住まい...(H3908 miahkn) ヘブル語でmishkanとshakanは関連がある。	詩篇74:7

4	サレムにも主の幕屋(H5220 sok)があり、シオン(H7826 siyon)に主の住まい(H4585 meona) 旧約聖書の中で「サレム」という言葉が使われているのは、「サレムの王エルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。(彼はいと高き神の祭司だった。創世記14:18)	詩篇76:2
5&6	シロの住まい(H4908 mishkan)人々の間に張った(H7931 shakan)主の幕屋(H168 ohel)	詩篇 78:60
7	そして、主はその聖所(H4720 miqdash)を、高い天のように建て(H1129 bana)られた。	詩篇 78:68~69
8	...あなたの聖なる(H6944 kodesh)宮(H1964 keykal)	詩篇 79:1

### 詩篇第4篇における砂時計（カイアスティック）構造

- A. 詩篇95:1~2 御前に進み賛美をもって、主に喜び叫ぼう。...7節 その御手の羊。
- B. 詩篇96:1~3 新しい歌を主に歌え：あらゆる国々、あらゆる民・全地球でを強調している。
- B. 詩篇96:13 主は全地球をさばくために来られる。
- ぜ 詩篇97:6 主の再臨...「諸国の民はその栄光を見る」
- B. 詩篇98:1~3 新しい歌を主に歌え：あらゆる国々、あらゆる民・全地球でを強調している。
- B. 詩篇98:9 主は全地球をさばくために来られる。
- A. 詩篇100... 主に向かって喜びの声をあげよ。-3節 主の民、その牧場の羊。

詩篇のセクション3(詩篇73~89)とセクション4(詩篇90~106)では、ダビデが8回、モーセが8回言及されているのも興味深い。(そして、3巻と4巻にのみ、2つの「砂時計構造」がある)

「神の牧場の羊」で始まり、「神の牧場の羊」で終わる。詩篇74~79および詩篇95~100)。アサフは全詩篇の中でモーセに言及したのは一度だけ(詩篇77)そしてダビデは一度だけである(詩篇78)。詩篇全体では、モーセは8回、ダビデはその11倍多い88回である。

### 栄光に満ちた地

マタイによる福音書では、イエスの栄光はもっと未来のこととして語られている。

「人の子は、やがて父の栄光を帯びて御使いたちとともに来ます。」  
(16:27)

「人の子がその栄光の御座に着かれるとき、その新しい世界で.....」 (19:28)

「人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを.....」 (24:30)

「人の子は、その栄光帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。」 (25:31)

今、地上はすでに神の栄光で満たされている。神の驚くべき創造と、神の驚くべき証しを見ることが出来るからだ。しかし、今はまた、罪の呪いと人間の反逆と混ざり合っている。しかし、聖書に預言されているように全地が神の栄光を完全に現す時が来るのだ。

「わたしが生きていて、主の栄光が全地に満ちている以上...」 (民数記14:21)

「地は、主の栄光を知ることによって満たされる。」 (ハバクク書2:14)

### 世界規模の神殿

メリル・F・アンガーは、「詩篇のセクション3、詩篇73篇から89篇は、主の聖所の神聖さを扱っている。

この部分はレビ記と比較されてきた。」\*(223)

イエスを信じる者たちは、今や神の住まわれる神殿なのである。

「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」 (エペソ2:19-22、Iペテロ2:5も参照)

旧約聖書の神殿と幕屋の歴史を見ると、神殿は時に荒れ果て、埃をかぶったまま放置され、異教の偶像が持ち込まれたこともあった。ある時は神の栄光が現れる喜びの礼拝の場であった。私たちは、私たち自身の生活と、世界中の教会の状況を考えるべきだ。私たちは神の神殿として、人々に神の栄光をもたらしているだろうか？それとも埃をかぶったぬるま湯の教会なのか。神と神の御言葉を信頼することに満足せず、「マナ」以上のものを求める反抗的な教会なのだろうか？ヒゼキヤとヨシヤのリバイバルは、私たちにとって良い模範である (II歴代誌 30~35)。神殿を清めたイエスの模範は、私たちが自分の意志ではなく、神の意志を成し遂げることを思い出させてくれる。神殿は偽りの教義に妥協する場所ではありません。神殿を清めてくださるイエスこそ真実だからです。そして、愛は真理を喜ぶ。(Iコリント13:6)

モーセの五書、歴代誌、詩篇の中ほどの章は、幕屋と神殿を指している。マタイは歴代誌とモーセの五書に基づいているので、「マタイの真ん中の章であるマタイによる福音書13章には、なぜ神殿が出てこないのですか？」と誰かが尋ねるかもしれない。マタイの前の章では、イエスは神殿よりも偉大な

方である（12:6）と言われたばかりである。イエス御自身がその神殿なのです。そして、ソロモンが神殿の山で8回祈り、神に「天から聞いてください」と願った代わりに、今度は神でおられるイエスが地上の低い場所、ガリラヤの海の海拔220メートル(海面)ほどの、誰もがイエスに近づくことのできる場所に来られたのである。マタイによる福音書13章で、イエスは私たちに、天の御国に関する8つのたとえ話を用いて、イエスの教えに耳を傾けるよう呼びかけている。

天の御国について。幕屋と神殿は、人々が神と正しい関係を結び、神と交わることができる場所であった。イエスは今、そのすべてをご自身のうちに成就された。神と正しい関係になり、神と交わるためには、イエスを通して来る必要がある。聖霊が私たちの内に宿ることによって、神のメッセージを世界に伝えることができるのです。

\* Unger, M.F. (1998). The New Unger's Bible Handbook. Chicago, Moody Press.